平成 29 年 9 月 15 日

ところ会員各位

ところ会　10 月行事案内

平成 29 年、第 10 回テーマ
【下野の歴史を訪ねる】

平成 29 年の秋のバス旅行を下記の通り計画しました。

記

■日　　時：平成 29 年 10 月 19 日（木）8 時 00 分集合
■集合場所：西武池袋線武蔵藤沢駅西口
■見学場所及び時間
　武蔵藤沢駅西口 8:05➡圏央道入間 IC…圏央道…東北道…（佐野 SA トイレ休憩）…栃木 IC➡大神神社➡壬生一里塚➡壬生城址・壬生町歴史民俗資料館➡下野薬師寺・下野薬師寺歴史館 ➡昼食処➡下野国分尼寺跡（国指定史跡）・風土記の丘資料館・下野国分寺跡（国指定史跡）➡琵琶塚古墳➡摩利支天塚古墳➡小山城（祇園城）➡佐野藤岡 IC➡東北道➡圏央道➡入間インター➡武蔵藤沢駅到着(18:30 頃)（解散）
■昼食場所：**自治医大多門**
■参加費用：5,000 円（計画中）

■見学場所簡単ガイド

＜大神神社＞

大神（おおみわ）神社は、栃木県栃木市惣社町にある**下野国一之宮**で**延喜式内社**です。主祭神は大物主大神（おおものぬしおおかみ）で**大国主神の和魂**（にぎたま）とされます。

社伝によりますと、大神神社は崇神天皇（3 世紀～4 世紀初めらしい）の皇子、豊城入彦命（とよきいりひこのみこと）が東国治定のとき、大和三輪山の大三輪大神（大神神社）を分祀したのが始まりで、その後 7 世紀後半下野国府が当地に置かれ、その後、国司が国内の有名な神々を合祀して惣社※2 とした（962 年頃）とされています。

沿革

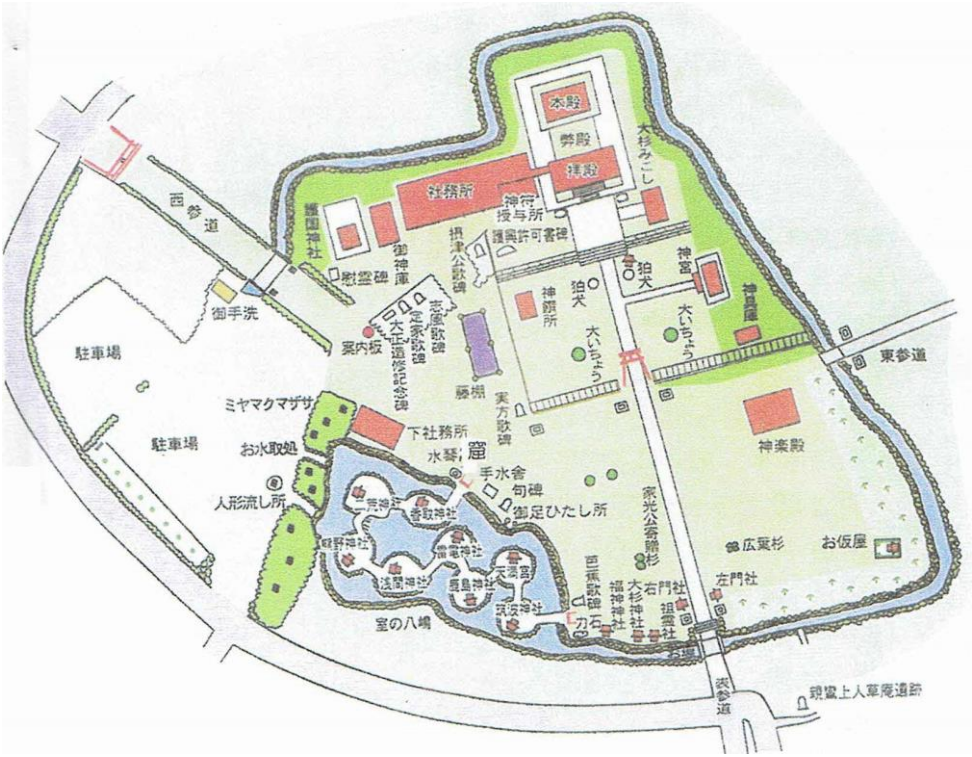
・天慶２年（939）：平将門の乱により焼き討ちがあり、その後藤原秀郷の寄進を受け再建

・天正 13 年（1585）北条氏直との戦で焼き打ち、再建されず荒廃した。

・寛永 17 年（1640）将軍家光が日光社参の時に参拝し寄進を受け再建。

※**和魂**（にぎたま）：荒魂（あらたま）は神の荒々しい側面、荒ぶる魂である。これに対し**和魂**は神の優しく平和的な側面である。荒魂と和魂は、同一の神であっても別の神名がある。

※**惣社（総社）**：国司は各国内の全ての神社を一宮から順に巡拝していたが、これを効率化するため、各国の国府近くに国内の神を合祀した総社を設け、まとめて祭祀を行うようになった。



室の八嶋：大神神社を**室の八嶋大明神**ともいい、大神神社内にある八つの島には、それぞれ社（浅間神社、二荒山神社、筑波神社、雷電神社、香取

神社、鹿島神社、熊野神社、天満宮）を祀っています。

室（むろ）の八嶋は歌枕の一つです。もともと竈のことを宮中で「むろのやしま」と言ったことから、室の八島は恋に身を燃やす「けぶり」に喩えて、多くの歌が詠まれました。それが、清水から発する蒸気が「室の八島のけぶり」と見なされ、いつしか下野の国の八島にみなされたようです。

＜壬生一里塚（国指定史跡）＞

この一里塚は、小山から壬生を経て今市に至る「日光道中壬生通り（日光西街道）」に設置された一里塚で、壬生城主がここで日光東照宮へ参拝にきた将軍、上役を出迎えたそうです。江戸から 23 里目（92km）にあたり塚の上部には榎が植えられている。

＜壬生城＞

前身である**壬生古城**は寛正３年(1462)、初代**壬生胤業**によって築かれました。文明年間（1469～86）に跡を継いだ２代綱重によって現在地付近に改めて整備されました。５代壬生義雄は居城を鹿沼城に移し、壬生城には城代を配しましたが、義雄は小田原北条家に与した為、小田原城が落城すると領地を取り上げられ壬生城は廃城となります。

その後、壬生領は結城秀康（徳川家康の次男）の支配下に入りますが、慶長７年（1602）に日根野吉明が１万 900 石の**壬生藩**を立藩します。

この時荒廃していた壬生城を大改修したと思われます。以後、阿部忠秋、三浦正次、松平輝貞、加藤明英と変わり正徳２年（1712）に鳥居忠英が３万石で入封してからは、明治維新まで鳥居氏８代の居城として存続しました。明治４年（1871）、廃藩置県により廃城となります。

城郭は本丸、二の丸を中心に三の丸、東曲輪、下台曲輪、正念寺曲輪の六つの曲輪が輪郭式に配置され、天守閣や櫓などは設けられませんでした。また、壬生は**日光街道**に面していたことから江戸時代初期は**将軍家が日光社参の際は宿所**として利用され重要視されました。現在は一部の土塁と水堀（元空掘）が残り、本丸は公園として整備され資料館が建っています。

＜壬生町立歴史民俗資料館＞

壬生町立歴史民俗資料館は、古きゆかりの地をしめて…戦国―江戸時代の壬生城址という歴史的な環境の中に立地し、開設しています。常設展示は「壬生のあゆみと文化」を基本テーマとして、特色ある歴史と文化を３つのコーナーから構成し一般公開しています。

＜下野薬師寺歴史館＞

下野薬師寺歴史館は、下野薬師寺跡の南西に隣接して建設された下野薬師寺跡のガイダンス施設です。館内では、発掘調査によって見つかった瓦をはじめとする出土遺物、下野薬師寺に関る文献史料、復元模型などの展示のほか、映像などによって下野薬師寺の歴史を解説しています。

展示の概要

1. 下野薬師寺の建立と隆盛

1/150 スケールの伽藍復元模型や戒壇模型、回廊の原寸大模型等のほか出土資料や文字資料等により下野薬師寺について展示しています。

2. 下野薬師寺跡の関連遺跡

東山道跡を中心として、歴史館建設の際に調査を実施した落内遺跡について展示しています

3. 下野市の文化財

下野薬師寺創建以前の古墳時代に関連した展示を行っています。

4. 映像コーナー

「下野薬師寺の歴史」「戒壇とは」「復元回廊の建築」の３種類の映像で下野薬師寺について知ることができます。

＜下野薬師寺跡（国指定史跡）＞

下野市、鬼怒川右岸に広がる広大な平野上に位置し、奈良時代に正式に僧尼を認める**戒壇**が設けられていたことで知られる。当時、戒壇は当寺のほかに**奈良の東大寺**と**筑紫の観世音寺**にしか設けられておらず、これらは「**三戒壇**」と総称されました。そのほか、道鏡が宇佐八幡宮神託事件ののち当寺に左遷されたことでも知られる寺院です。

下野薬師寺は衰退と中興を繰り返しており、現在は初期寺院跡の発掘調査が進んでいる。また、跡地には安国寺が設けられ、下野薬師寺の法燈を現在に伝えています。

＜下野風土記の丘資料館＞

古墳文化、律令国家と仏教文化などテーマ別に下野国の考古学資料を展示。展示品は鏡などの出土品や下野国分寺の七重塔の模型、古墳の復元図など。

＜下野国分尼寺跡（国指定史跡）＞

下野国分尼寺跡は、下野国分寺跡の東方約600m のところにあり、国分寺と同じく聖武天皇の詔によって建てられた国立の寺院です。伽藍（寺の建物）配置も、国分寺と同様に東大寺式ですが、塔はつくられませんでした。昭和 39 年度から 43 年度にかけての発掘調査の結果、建物の規模は、金堂が間口 7 間（21m）×奥行き 4 間（12.1m）で、凝灰岩の礎石をもつ瓦葺きの建物であることがわかりました。また、講堂の北側には尼たちが日常生活を営む尼房という建物も見つかっています。さらに、平成 5 年度から 10 年度にかけて、寺院の範囲を確認するための発掘調査が実施され、その結果、全体の規模は南北約 270m、東西約 145m で、その東側に南北約 211m、東西約 52m の張り出し部分があることがわかりました。現在、下野国分尼寺跡は、主要伽藍の基壇と礎石が復元表示され、史跡公園として人々の憩いの場として活用されています。

＜下野国分寺跡（国指定史跡）＞

下野国分寺跡は、奈良時代の天平 13 年（741）、聖武天皇の詔によって全国 60 数か所に建てられた国立の寺院のひとつです。伽藍（寺の建物）配置は、全国の総国分寺である奈良の東大寺と同じ形式（東大寺式）で、南北一直線上に南から、南大門、中門、金堂、講堂が並び、中門と金堂は回廊によってつながれています。塔は回廊の外側東

方に置かれ、基壇の規模から七重塔であったと推定されています。また、金堂・講堂を挟んで東西には鐘楼、経蔵が置かれています。

これまでの発掘調査から、寺院地の規模が東西 413m、南北 457m になることや、南大門、塔の規模などが明らかになっています。また、堀や溝の作り替えから、伽藍地とその外側を区別する寺院地の範囲や変遷がほぼ明らかにされ、１～５期に時期区分されています。１期（8 世紀中葉）は塔・金堂などの創建期、２期（８世紀後半～９世紀前半代）は主要堂塔が完成し伽藍地を掘立柱塀で囲む時期、３期（９世紀後半代）は伽藍地を縮小して掘立柱塀を築地塀に建て替え、寺院全体を大きく改修する時期、４期（10 世紀以降）は主要堂塔の補修や溝の掘り直しを行わなくなる衰退期と考えられます。下野国分寺の終焉は明確になっていませんが、遺構・遺物からみると、11 世紀ないし 12 世紀代まで法灯が続いていたと推測されます。

＜琵琶塚古墳（国指定史跡）＞

琵琶塚古墳は、小山市大字飯塚にある古墳で形状は前方後円墳。栃木県では第２位の規模の古墳で、６世紀初頭（古墳時代後期）の築造とされる。

栃木県南部、思川・姿川に挟まれた台地上に築かれた古墳で前方部を南南西に向ける。墳丘の築造では、自然の土ぶくれを利用して設けられた基壇の上に、２段で土盛りがなされている。築造時期については、古墳の形状や出土埴輪から６世紀初頭とされ、墳丘１段目・２段目で円筒埴輪列が確認されている。

本古墳の南方には同じく大規模古墳である摩利支天塚古墳があり、ともに下毛野地域を代表する首長墓とされる。両古墳築造後も、思川・姿川間の台地の北方では「下野型古墳」と呼ばれる独特の前方後円墳群が営まれていった。

＜摩利支天塚古墳（国指定史跡）＞

摩利支天塚古墳（まりしてんづかこふん）は、栃木県小山市大字飯塚にある

古墳。形状は前方後円墳。栃木県では第３位の規模の古墳で、５世紀末（古墳時代中期）の築造とされる。

古墳は前方部を南西に向ける。墳丘は自然の微高地を利用して築かれており、墳丘上には円筒埴輪が列をなして存在している。築造時期については、古墳の形状や出土埴輪から５世紀末とされる。

＜小山城（国指定史跡）＞

小山城（おやまじょう）は栃木県小山市城山町（下野国都賀郡小山）にあった日本の城。地元では主に別名の祇園城（ぎおんじょう）で呼ばれている。城跡は、祇園城跡の名称で中久喜城跡、鷲城跡とともに小山氏城跡として、国の史跡に指定されている。小山城は、久安４年（1148）に小山政光によって築かれたとの伝承がある。小山氏は武蔵国に本領を有し藤原秀郷の後裔と称した太田氏の出自で、政光がはじめて下野国小山に移住して小山氏を名乗った。

小山城は中久喜城、鷲城とならび、鎌倉時代に下野国守護を務めた小山氏の主要な居城であった。当初は鷲城の支城であったが、南北朝時代に小山泰朝が居城として以来、小山氏代々の本城となった。康暦２年（1380）から永徳２年（1383）にかけて起こった小山義政の乱では、小山方の拠点として文献資料に記された鷲城、岩壺城、新々城、祇園城、宿城のうち「祇園城」が小山城と考えられている。小山氏は義政の乱で鎌倉府により追討され断絶したが、同族の結城家から養子を迎えて再興した。

その後は、代々小山氏の居城であったが、天正４年（1576）に小山秀綱が北条氏に降伏して開城し、北条氏の手によって改修され、北関東攻略の拠点となっている。小田原征伐ののち、慶長 12 年（1602）頃、本多正純が相模国玉縄より入封したが、正純は元和５年（1619）に宇都宮へ移封となり、小山城は廃城となった。